

平成25年度佐賀県小・中学校学習状況調査及び全国学力・学習状況調査を活用した調査Web報告書

[Web報告書もくじ](#) > IV 児童生徒意識調査結果の分析

児童生徒意識調査結果の分析

[児童生徒意識調査結果の分析に関わる全てのグラフ](#)

1 学校生活

- 学校生活に楽しさを感じている児童生徒の割合は、どの学年においても9割を上回っていた。また、学校に行くことに楽しさを感じている児童生徒の割合は、8割を上回っていた。学校生活や学校に行くことに楽しさを感じている児童生徒ほど平均正答率は高くなっていた。[図1][図2][図3]
- 友達と会うことに楽しさを感じている児童生徒の割合は、全ての学年において9割を上回っており、楽しさを感じている児童生徒ほど平均正答率は高くなっていた。[図4][図5]
- 学校の授業の中で、好きな授業があると感じている児童生徒の割合は、小学5年が最も高く、学年が上がるに従って、その割合は低くなっていた。好きな授業がある児童生徒ほど平均正答率は高くなっていた。[図6][図7]

ここでは、児童生徒の学校生活について、学校生活の楽しさと全教科平均正答率との関連から分析を行った。

ア 「学校での生活は楽しい」「学校に行くのは楽しい」について

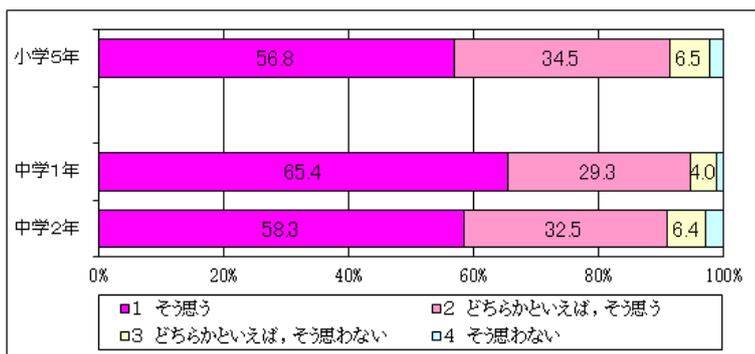


図1 「学校での生活は楽しい」の回答の割合

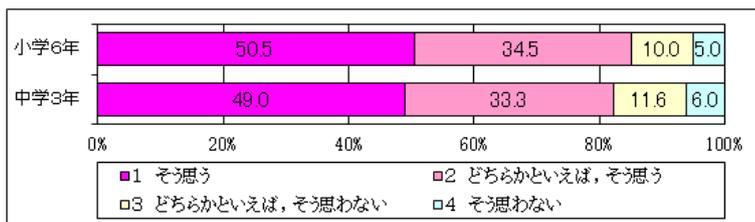


図2 「学校に行くのは楽しい」の回答の割合

佐賀県が実施した意識調査の設問「学校での生活は楽しい」において、「そう思う」「どちらかといえば、そう思う」と回答した児童生徒の割合は、小学5年91.3%、中学1年94.7%、中学2年90.8%となり、どの学年も9割を上回る結果となった。国が実施した意識調査の設問「学校に行くのは楽しい」において「そう思う」「どちらかといえば、そう思う」と回答した児童生徒の割合は、小学6年85.0%、中学3年82.3%となり、どちらの学年も8割を上回る結果となった。特に、中学1年では94.7%と最も高い割合となった。【図1】【図2】

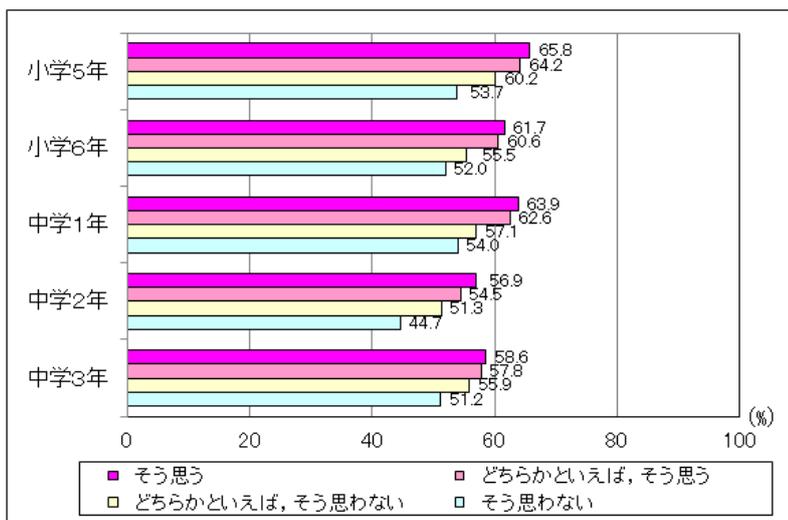


図3 「学校での生活は楽しい」「学校に行くのは楽しい」の回答状況と正答率

回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、全ての学年において、「そう思う」と回答した児童生徒の平均正答率が最も高くなっている。「学校での生活は楽しい」「学校に行くのは楽しい」と回答した児童生徒ほど、平均正答率が高くなっている。【図3】

イ 「友達に会うのは楽しい」について

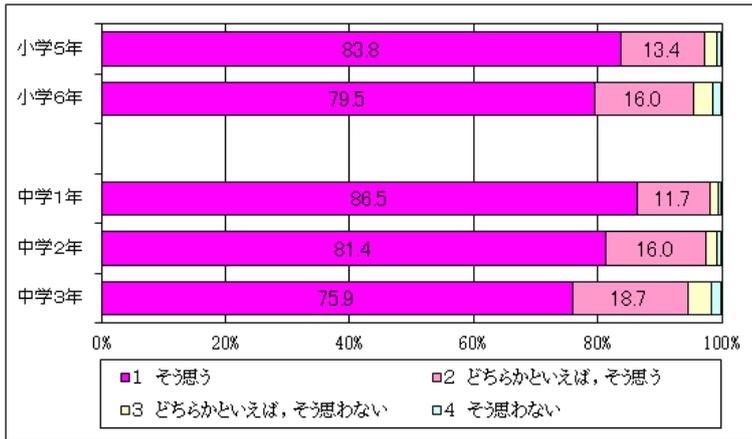


図4 「友達に会うのは楽しい」の回答の割合

「思う」「どちらかといえば、思う」と回答した児童生徒の割合は、小学5年97.2%、小学6年95.5%、中学1年98.2%、中学2年97.4%、中学3年94.6%となり、全ての学年で9割を上回る結果となった。特に、中学1年では98.2%と最も高い割合であった。[図4]

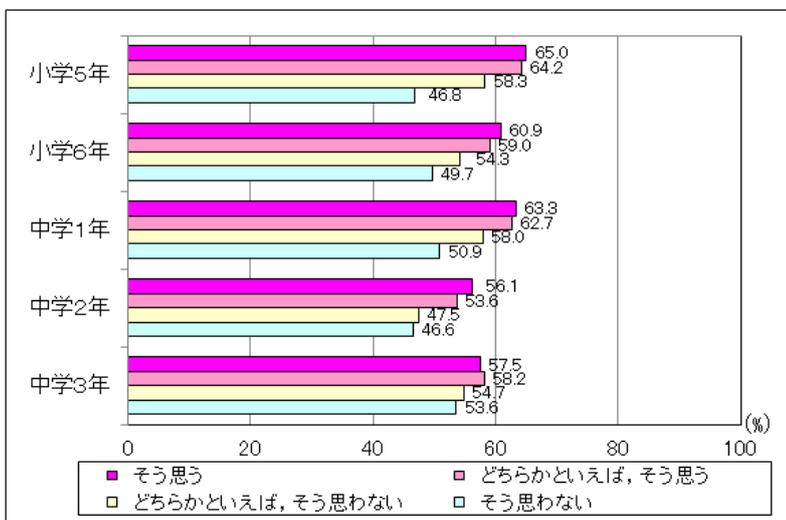


図5 「友達に会うのは楽しい」の回答状況と正答率

回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、小学5年から中学2年までにおいては「思う」と回答した児童生徒の平均正答率が最も高くなっている。中学3年においては「どちらかといえば、思う」と回答した生徒の平均正答率が最も高くなっている。全ての学年において、友達に会うことに楽しさを感じている児童生徒の方が、楽しさを感じていない児童生徒より平均正答率が高くなっている。[図5]

ウ 「好きな授業がある」について

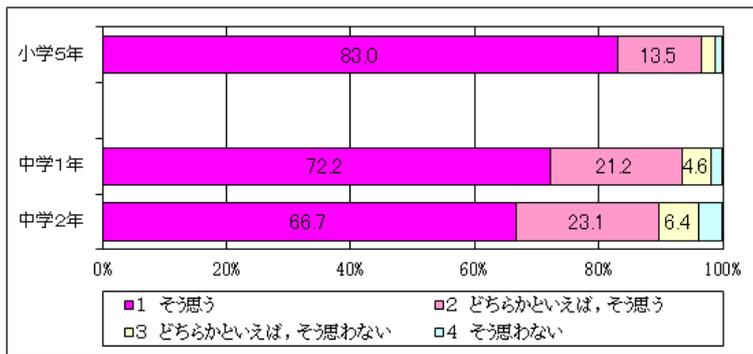


図6 「好きな授業がある」の回答の割合

佐賀県が実施した意識調査の設問「好きな授業がある」において、「そう思う」「どちらかといえば、そう思う」と回答した児童生徒の割合は、小学5年96.5%、中学1年93.4%、中学2年89.8%となり、学年が上がるにつれてその割合が低くなっている。[図6]

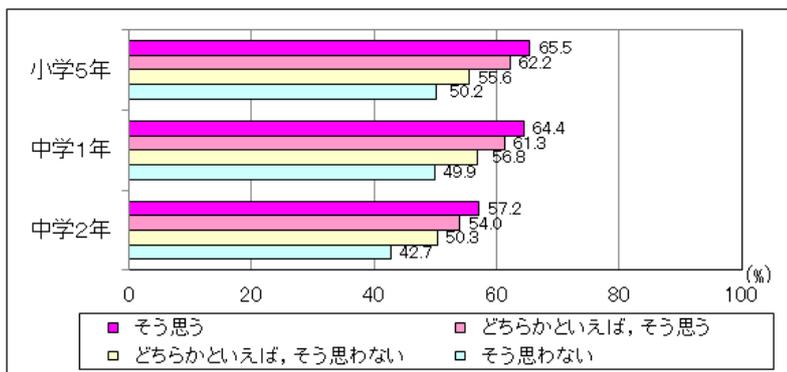


図7 「好きな授業がある」の回答状況と正答率

回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、どの学年においても「そう思う」と回答した児童生徒の平均正答率が最も高くなっている。小学5年と中学1年、中学2年において「そう思う」と回答した児童生徒の平均正答率と「そう思わない」と回答した児童生徒の平均正答率とを比べると14.5ポイント以上の差が見られた。

[図7]

○ これからの指導に向けて

支持的風土から安心して学習に取り組める環境づくりを

「友達に会うのは楽しい」では、全ての学年において「そう思う」「どちらかといえば、そう思う」と回答した児童生徒の割合は、9割を上回り、平均正答率も高くなっていた。このことから、友達関係と学力の定着については関連があると考えられる。友達同士が、互いに認め合ったり励まし合ったりすることは、安心して学習に取り組める環境へとつながる。この安心して学習に取り組める環境が、学習者同士で互いの考えを安心して伝え合うことにつながるのではないかと考える。安心して考えを伝え合うことは、安心して学び合うことであり、学力の向上へとつながっていくのではないかと考える。そのため、学級経営を基盤とした授業づくりが大切である。

達成感や有用感が感じられる授業づくりを

佐賀県が実施した意識調査にある「好きな授業がある」について「そう思う」と回答した児童生徒の平均正答率が最も高くなっており、好きな授業がある児童生徒ほど平均正答率は高くなっていた。このことから、好きな授業があることと学力の定着については関連があると考えられる。授業が好きになるきっかけは児童生徒によって様々である。授業の中で「分かった」「できた」といった達成感を味わわせたり、学んだことを他教科や生活場面に生かすような授業を仕組むことで学んだことを生かせるという有用感を感じさせたりするような授業づくりが大切である。特に、達成感においては、できる限り児童生徒の実態に応じてスモールステップを設定し、「分かった喜び」や「できた喜び」を味わわせていくことが大切になる。

最終更新日：2013-10-21

平成25年度佐賀県小・中学校学習状況調査及び全国学力・学習状況調査を活用した調査Web報告書

[Web報告書もくじ](#) > IV 児童生徒意識調査結果の分析

児童生徒意識調査結果の分析

[児童生徒意識調査結果の分析に関わる全てのグラフ](#)

2 学習動機

- 全ての学年において、国語や算数、数学の勉強が好きと感じている児童生徒ほど平均正答率は高くなっており、「当てはまらない」と回答した児童生徒の平均正答率よりも9.0ポイント以上の差があった。[図2][図6]
- 小学校、及び中学校において、国語や算数、数学の勉強に対して有用感を感じている児童生徒の割合は、学年が上がるにつれて低くなっていた。[図3][図7]

ここでは、学習への動機について、全ての学年において調査が実施された国語と算数、数学に対する意識と全教科平均正答率との関連から分析を行った。

ア 「国語の勉強は好きだ」について

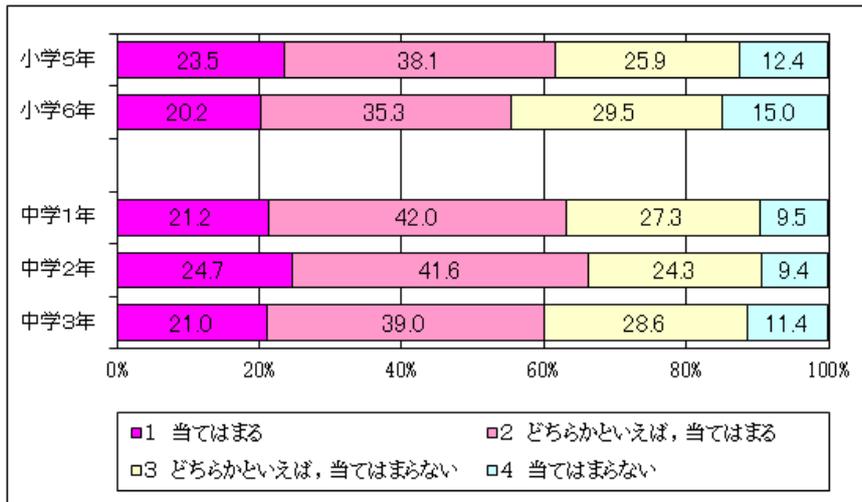


図1 「国語の勉強は好きだ」の回答の割合

「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した児童生徒の割合は、小学5年61.6%、小学6年55.5%、中学1年63.2%、中学2年66.3%、中学3年60.0%であった。全体では、中学2年で最も高い割合を示していた。校種別に見ると、小学6年と中学3年とが最も低い割合を示していた。〔図1〕

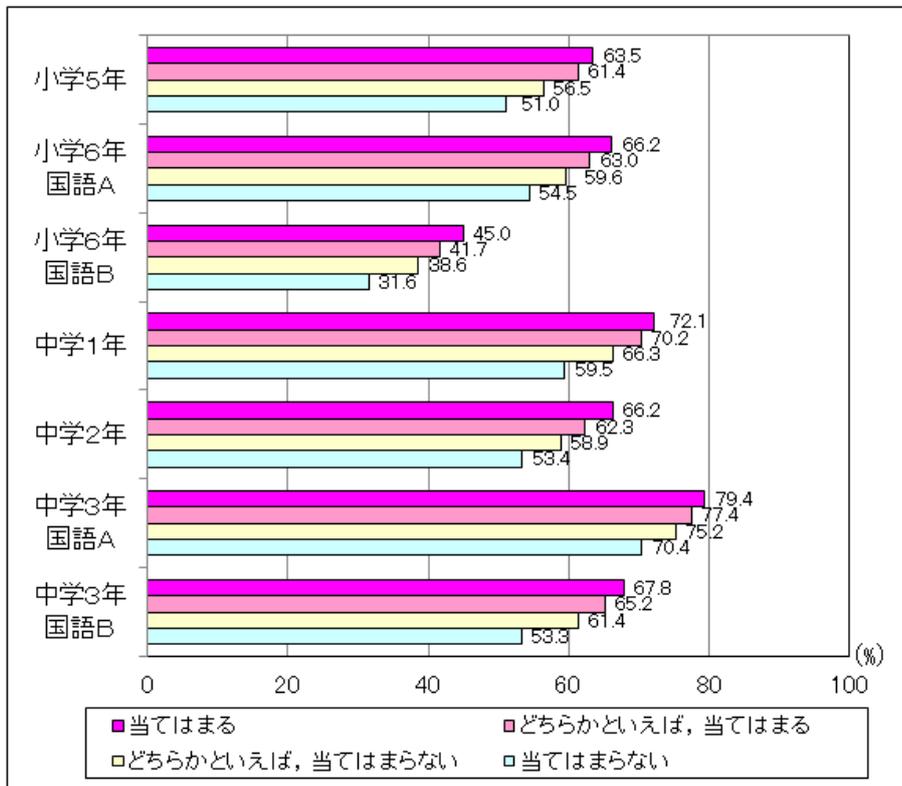


図2 「国語の勉強は好きだ」の回答状況と国語の平均正答率

回答状況と国語の平均正答率との関連を見ると、全ての学年で「当てはまる」と回答した児童生徒の平均正答率が最も高くなっている。「当てはまる」と回答した児童生徒の平均正答率と「当てはまらない」と回答した児童生徒の平均正答率の差を見ると、全ての学年で9.0ポイント以上の差があった。特に、小学6年の国語Bで13.4ポイント、中学3年の国語Bで14.5ポイントであり、他の学年に比べて差が大きかった。〔図2〕

イ 「国語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つ」について

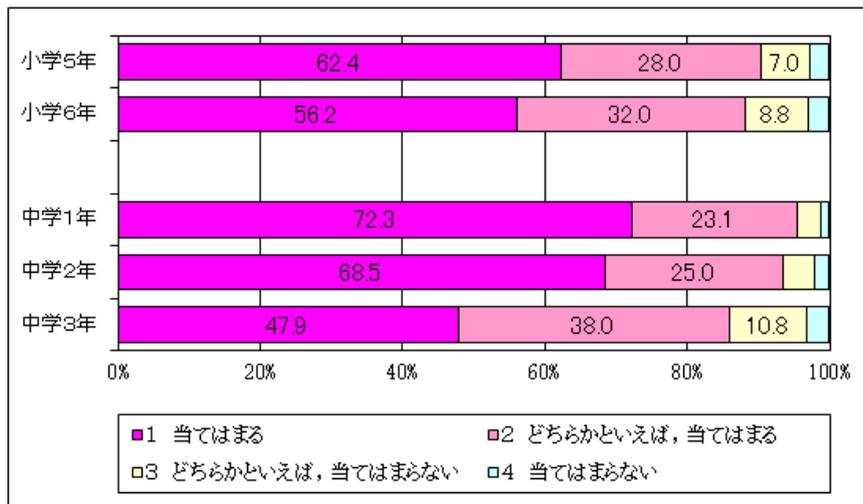


図3 「国語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つ」の回答の割合

「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した児童生徒の割合は、小学5年90.4%、小学6年88.2%、中学1年95.4%、中学2年93.5%、中学3年85.9%であった。特に、中学1年において95%を上回る割合を示していた。校種別に見ると、学年が上がるにつれて「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した児童生徒の割合は低くなっている。[図3]

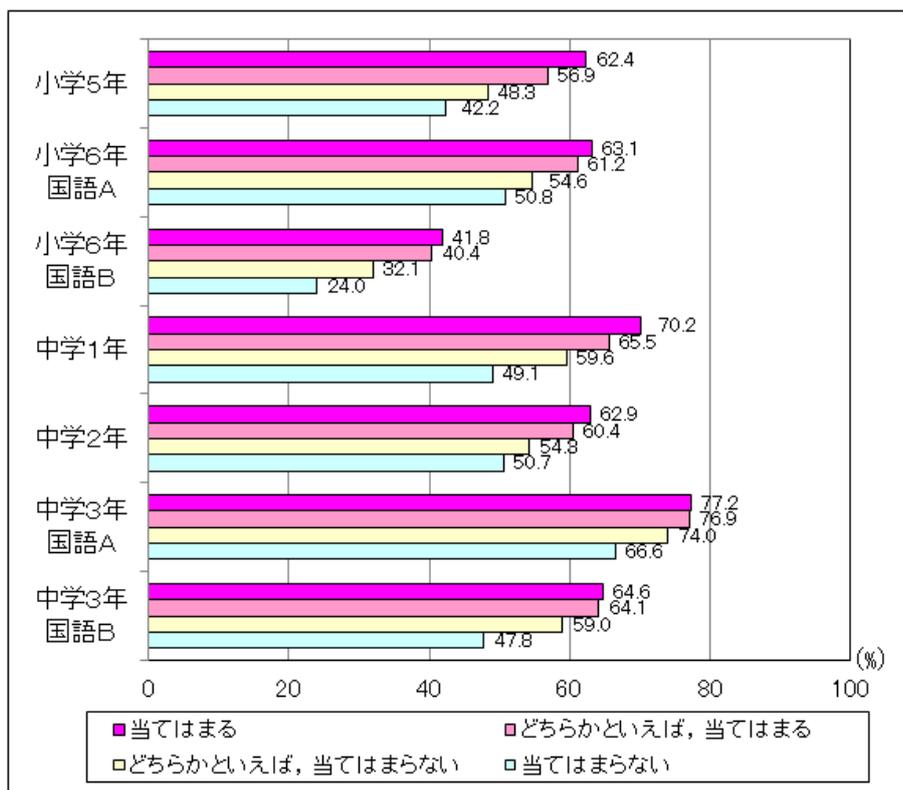


図4 「国語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つ」の回答状況と国語の平均正答率

回答状況と国語の平均正答率との関連を見ると、全ての学年で「当てはまる」と回答した児童生徒の平均正答率が最も高くなっている。「当てはまる」と回答した児童生徒の平均正答率と「当てはまらない」と回答した児童生徒の平均正答率の差を見ると、全ての学年で10.0ポイント以上の差があった。特に、小学5年と中学1年の国語は20.0ポイント以上の差があり、他の学年に比べて差が大きかった。[図4]

ウ 「算数(数学)の勉強は好きだ」について

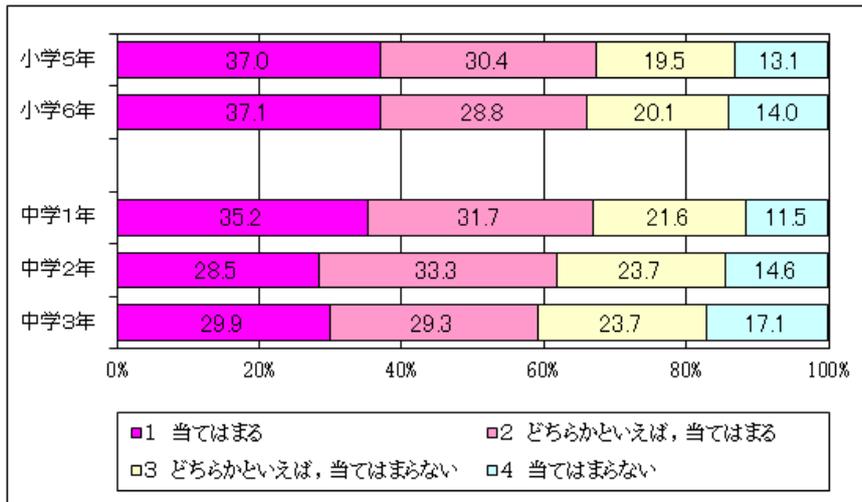


図5 「算数(数学)の勉強は好きだ」の回答の割合

「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した児童生徒の割合は、小学5年67.4%、小学6年65.9%、中学1年66.9%、中学2年61.8%、中学3年59.2%であった。校種別に見ると、学年が上がるにつれて「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した児童生徒の割合は低くなっている。[図5]

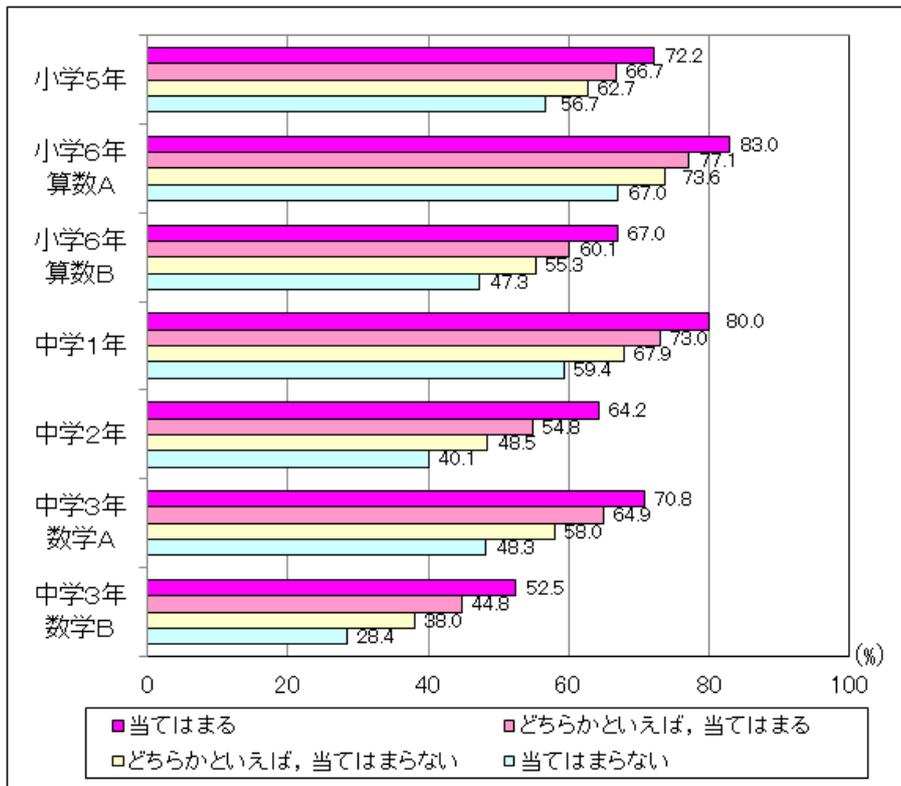


図6 「算数(数学)の勉強は好きだ」の回答状況と算数(数学)の平均正答率

回答状況と算数(数学)の平均正答率との関連を見ると、全ての学年で「当てはまる」と回答した児童生徒の平均正答率が最も高くなっている。「当てはまる」と回答した児童生徒の平均正答率と「当てはまらない」と回答した児童生徒の平均正答率の差を校種別に見ると、小学校では15.5ポイント以上、中学校では20.6ポイント以上の差があった。[図6]

エ 「算数(数学)の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つ」について

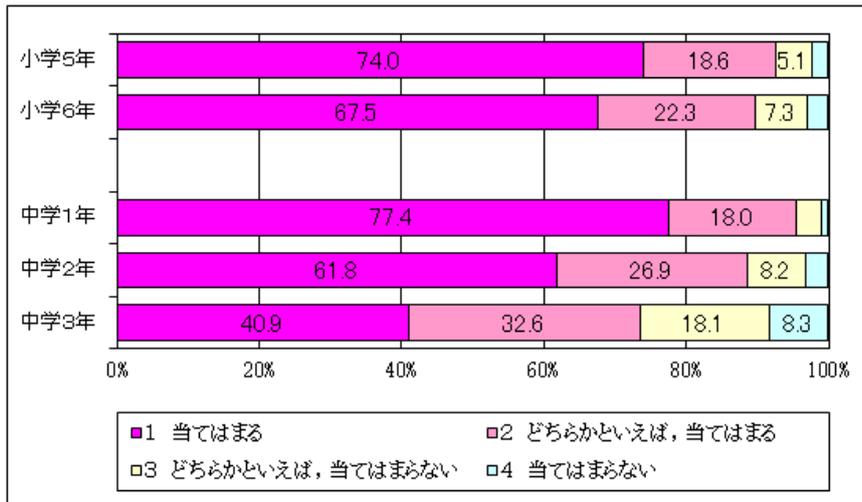


図7 「算数(数学)の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役立つ」の回答の割合

「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した児童生徒の割合は、小学5年92.6%、小学6年89.8%、中学1年95.4%、中学2年88.7%、中学3年73.5%であった。校種別に見ると、学年が上がるにつれて「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した児童生徒の割合は低くなっている。[図7]

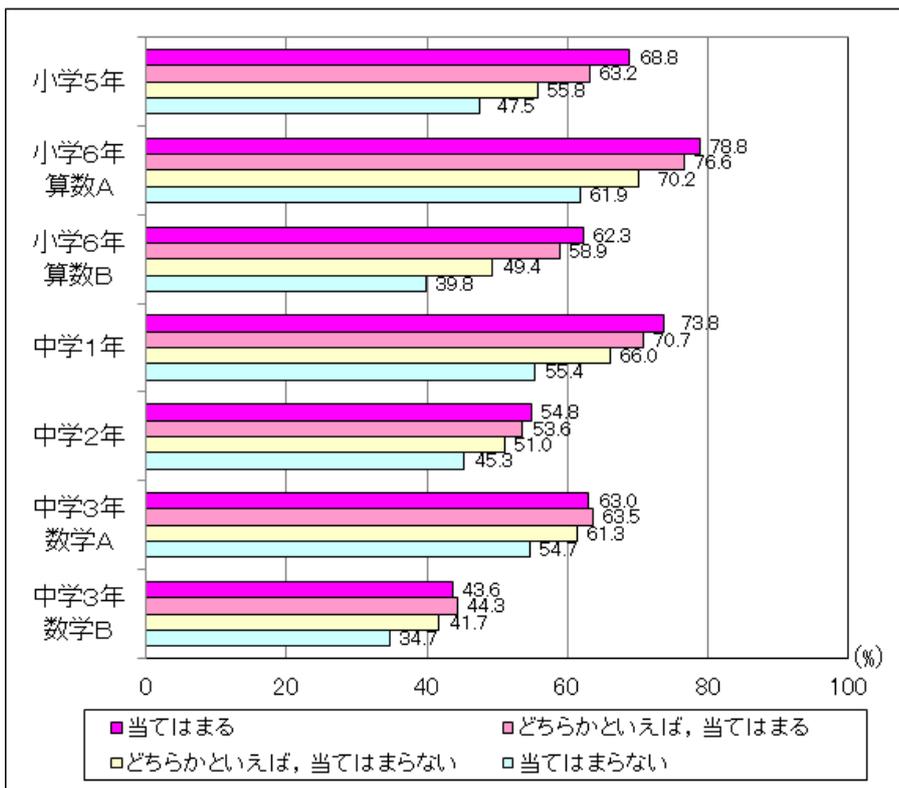


図8 「算数(数学)の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役立つ」の回答状況と算数(数学)の平均正答率

回答状況と算数(数学)の平均正答率との関連を見ると、小学5年から中学2年までにおいては「当てはまる」と回答した児童生徒の平均正答率が最も高くなっている。中学3年においては「どちらかといえば、当てはまる」と回答した生徒の平均正答率が最も高くなっている。全ての学年において、学習したことの有用感を感じている児童生徒の方が、有用感を感じていない児童生徒より平均正答率が高くなっている。[図8]

○ これからの指導に向けて

他教科や日常生活とのつながりを意識させる授業づくりを

各教科の学習が好きになる理由は、児童生徒によって様々である。好きになる理由の1つに、各教科の学習が「他教科や日常生活に生かせる」「将来役立つ」などの有用感がある。この有用感は、児童生徒にとって学習する必然性となり、学習に対する意欲へとつながっていくと考える。そこで、学習課題(学習問題)を日常生活から設定したり、他教科において学習した内容を生かさせるような声かけをしたりすることで、学習したことが他教科や日常生活と結び付いていることを意識付けることが大切である。単元の終末では、日常生活に結び付くような学習を仕組むことで学習した内容を日常生活の中で生かしていこうとする意欲をもたせていくことも大切である。

最終更新日:2013-10-21

平成25年度佐賀県小・中学校学習状況調査及び全国学力・学習状況調査を活用した調査Web報告書

Web報告書もくじ > IV 児童生徒意識調査結果の分析

児童生徒意識調査結果の分析

[児童生徒意識調査結果の分析に関わる全てのグラフ](#)

3 学習活動(教科全般)

- 普段の授業で自分の考えを発表する機会は、平成23年度からの経年で比較すると年々増加しており、発表する機会が与えられている児童生徒ほど、全教科平均正答率は高くなっていた。[図1][図2]
- 学校の授業などで自分の考えを表現することに対して難しいと感じている児童生徒は、平成23年度からの経年で比較すると年々減少しており、表現することに難しさを感じている児童生徒ほど、全教科平均正答率は低くなっていた。[図3][図4]

ここでは、教科全般における学習活動について、自分の考えを発表する機会と自分の考えを表現することに対する意識の変容を平成23年度からの調査結果と比較し、分析を行った。また、平成25年度の調査結果と全教科平均正答率との関連からも分析を行った。

ア 「普段の授業では、自分の考えを発表する機会があたえられていると思う」についての経年比較(同一学年)

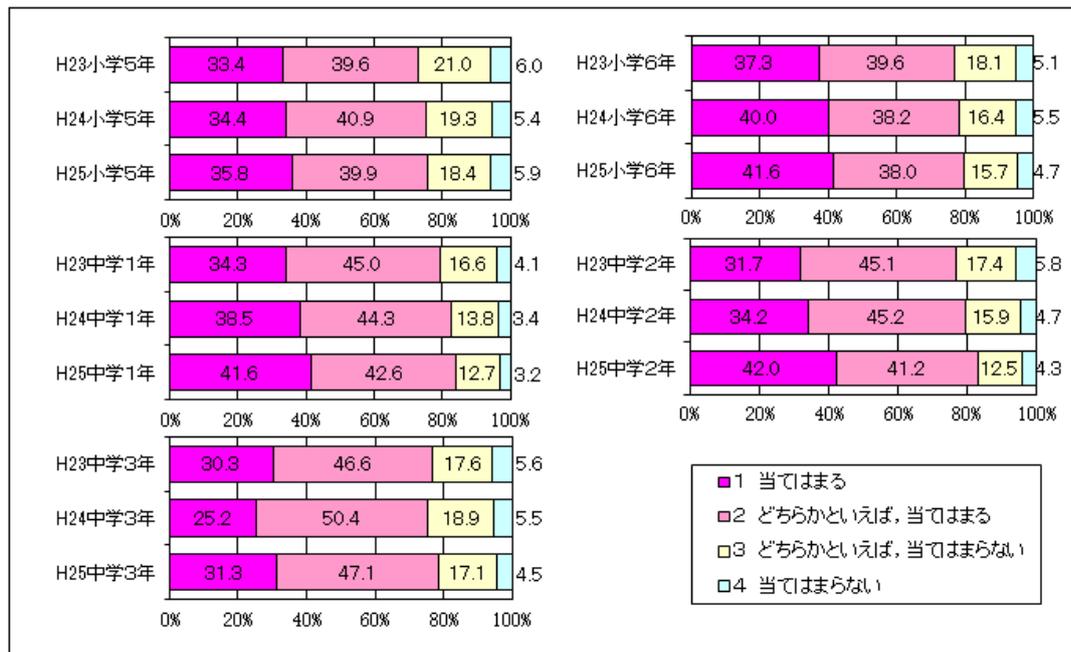


図1 「普段の授業では、自分の考えを発表する機会があたえられていると思う」の回答の割合の経年比較

平成25年度の調査において「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した児童生徒の割合は、小学5年75.7%、小学6年79.6%、中学1年84.2%、中学2年83.2%、中学3年78.4%となり、全ての学年において7割を上回る結果となった。同一学年において「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した児童生徒の割合を、平成23年度からの経年で比較すると、小学5年から中学2年までは徐々に高くなっている。中学3年においては、平成23年度と比べると1.5ポイント高くなっている。[図1]

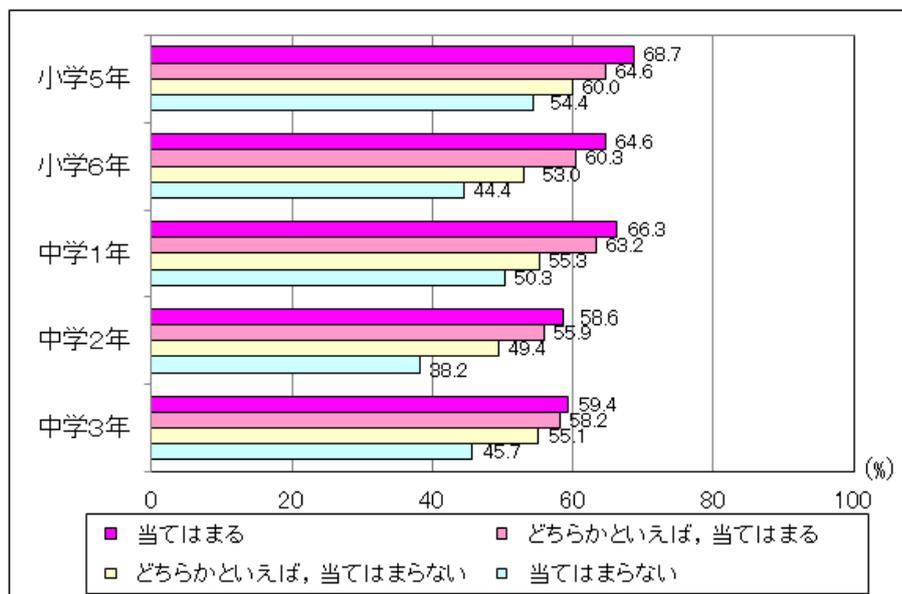


図2 「普段の授業では、自分の考えを発表する機会があたえられていると思う」の回答状況と全教科平均正答率(平成25年度)

回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、全ての学年において「当てはまる」と回答した児童生徒の平均正答率が最も高くなっている。「当てはまる」と回答した児童生徒の平均正答率と「当てはまらない」と回答した児童生徒の平均正答率とを比較すると、全ての学年において10.0ポイント以上の差があった。[図2]

イ 「学校の授業などで、自分の考えをほかの人に説明したり、文章に書いたりするのは難しい」についての経年比較(同一学年)

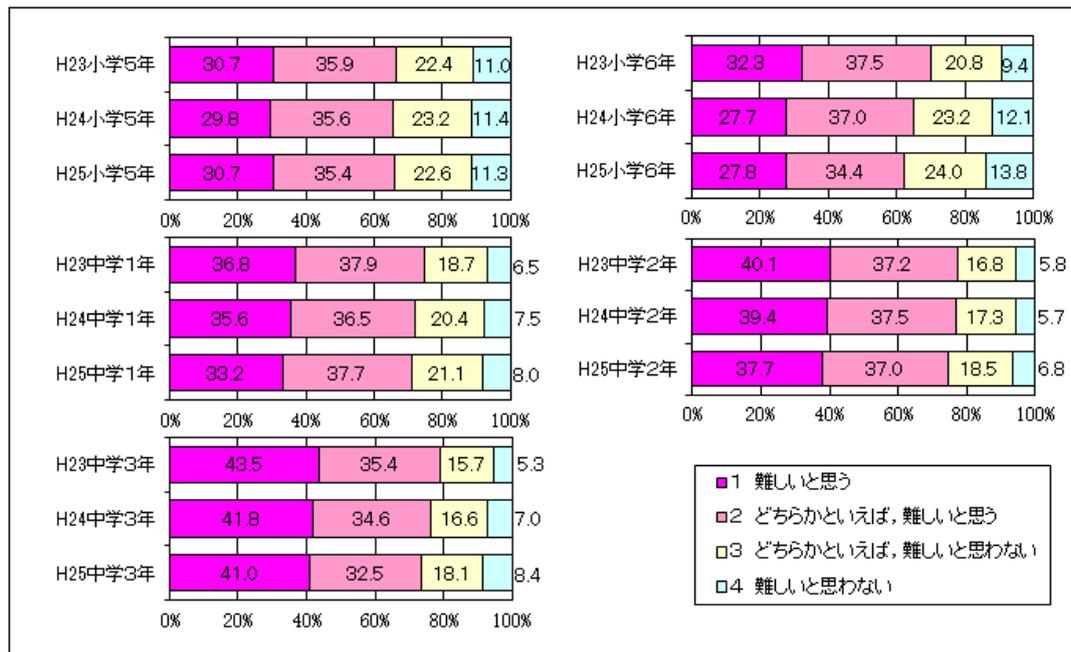


図3 「学校の授業などで、自分の考えをほかの人に説明したり、文章に書いたりするのは難しい」の回答の割合の経年比較

平成25年度の調査において「難しいと思う」「どちらかといえば、難しいと思う」と回答した児童生徒の割合は、小学5年66.1%、小学6年62.2%、中学1年70.9%、中学2年74.7%、中学3年73.5%となっている。同一学年において「難しいと思う」「どちらかといえば、難しいと思う」と回答した児童生徒の割合を、平成23年度からの経年で比較すると、小学6年から中学3年までは年々低くなってきており、難しさを感じる児童生徒が少なくなっていることがうかがえる。小学5年においては、変化が見られなかった。[図3]

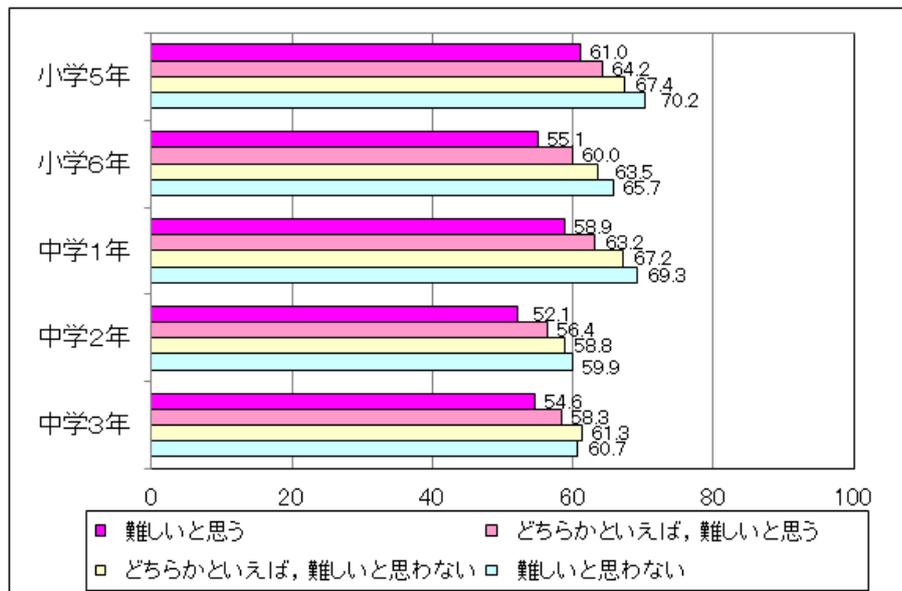


図4 「学校の授業などで、自分の考えを他の人に説明したり、文章に書いたりするのは難しい」の回答状況と全教科平均正答率(平成25年度)

回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、「難しいと思う」と回答した児童生徒の平均正答率が最も低くなっており、小学5年から中学3年までにおいては、難しさを感じている児童生徒より感じていない児童生徒の方の平均正答率が高くなる結果であった。[図4]

○ これからの指導に向けて

自分の考えと他者の考えを比較する場の設定を

普段の授業の中で、児童生徒が自分の考えを発表する機会は、年々増加してきていることがうかがえた。自分の考えを発表し交流する活動は、自分の考えと他者の考えとを比較する活動であり、児童生徒の思考力・判断力・表現力等を育成していく上で大切な活動である。考えを発表する場では、聞き手に相似点や相違点を考えながら聞かせたり、発表者に相似点や相違点を示しながら発表させたりするなどの工夫も大切である。

自分の考えを記述する活動を

自分の考えを表現することへの抵抗感は、年々和らいできていることがうかがえた。このことから、自分の考えを表現するための指導改善が図られてきたことがうかがえる。しかしながら、依然として小学校においては6割を上回る割合で、中学校においては7割を上回る割合で自分の考えを表現することに対して難しさを感じている。

そこで、自分の考えを文章に書いて表現する活動に着目したい。自分の考えを文章に書いて表現する活動は、自分の考えを整理することにつながるだけでなく、自分の考えを明確にする効果も期待できる。そればかりでなく、文章に書き表したことで、自分の考えを他の人に説明もしやすくなるを考える。自分の考えを発表させる際や、学級またはグループで考えを交流させる際には、まず自分の考えを文章に書かせた上で行うことが効果的ではないかと考える。そのためにも、自分の考えを書き表すための指導を丁寧にしていくことが大切である。

最終更新日:2013-10-21

平成25年度佐賀県小・中学校学習状況調査及び全国学力・学習状況調査を活用した調査Web報告書

Web報告書もくじ> IV 児童生徒意識調査結果の分析

児童生徒意識調査結果の分析

児童生徒意識調査結果の分析に関わる全てのグラフ

4 家庭学習

- 1日あたりの学習時間について、小学校では、1時間以上学習している児童の割合が年々高くなっており、中学校では、中学1年と中学3年とで2時間以上学習している生徒の割合が年々高くなっていった。[図1]
- 自分で計画を立てて勉強する児童生徒の割合に大きな変化は見られないが、計画を立てて勉強する児童生徒ほど、全教科平均正答率は高くなっていった。[図3][図4]

ここでは、家庭での学習状況について、普段の学習時間と計画的な学習の変容を平成23年度からの調査結果と比較し、分析を行った。また、平成25年度の調査結果と全教科平均正答率との関連からも分析を行った。学校の宿題については、平成25年度の回答の割合と全教科平均正答率との関連から分析を行った。

ア 「学校の授業時間以外に、普段(月曜日から金曜日)、1日あたりどれくらいの時間、勉強しますか」についての経年比較(同一学年)

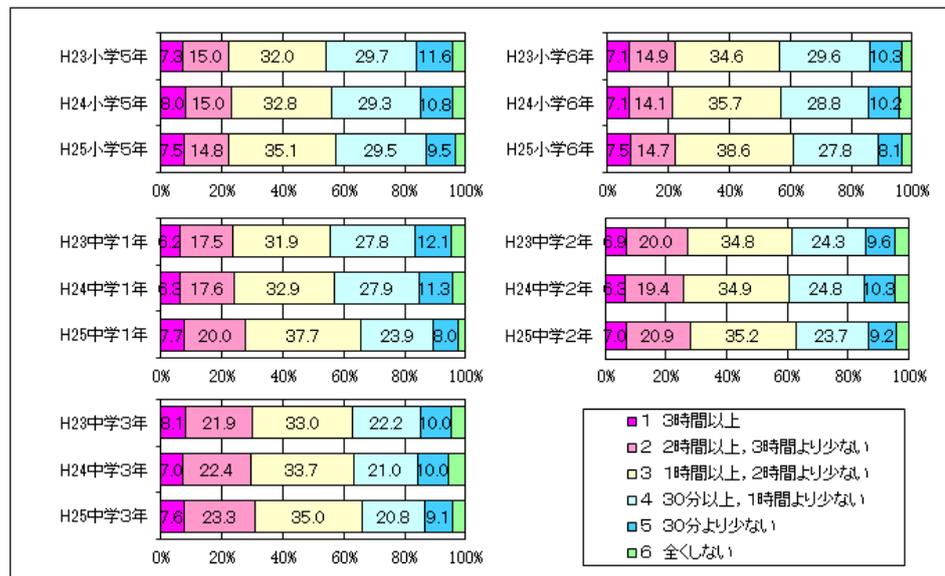


図1 「学校の授業時間以外に、普段、1日あたりどれくらいの時間、勉強しますか」の回答の割合の経年比較

平成25年度の調査を見ると、全ての学年において「1時間以上、2時間より少ない」と回答した児童生徒の割合が最も高く、35%を上回っていた。同一学年において、1時間より少ないと回答した児童生徒の割合を、平成23年度からの経年で比較すると、全ての学年において、学校の授業以外での学習時間は増加してきている。[図1]

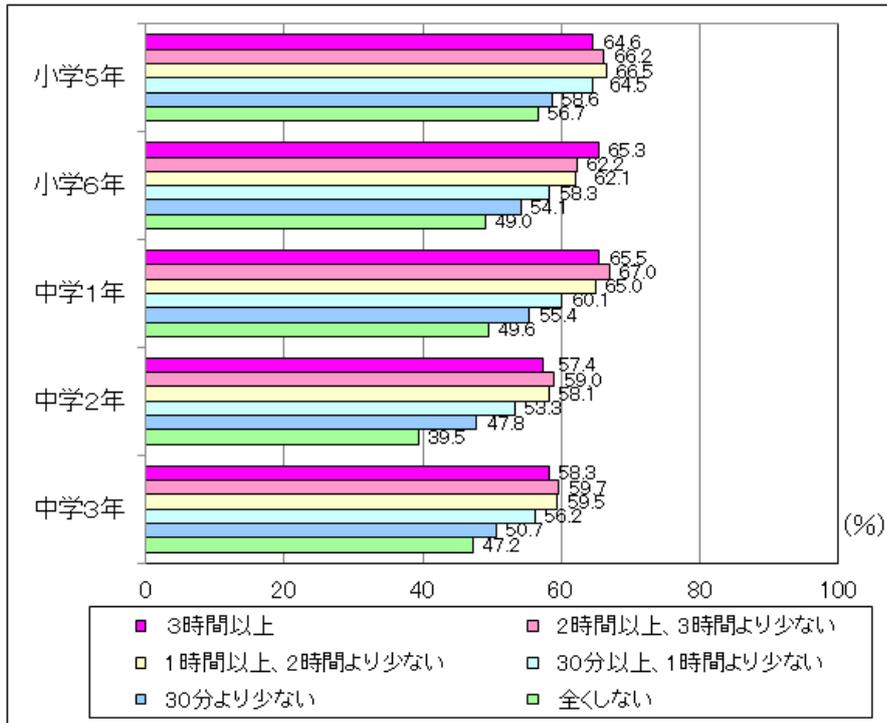


図2 「学校の授業時間以外に、普段、1日あたりどれくらいの時間、勉強しますか」の回答状況と度全教科平均正答率(平成25年度)

回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、全ての学年において、1時間以上学習している児童生徒の平均正答率の方が、1時間より少ない時間学習している児童生徒の平均正答率よりも高い正答率であった。1時間以上学習していると回答した児童生徒の平均正答率を選択肢ごとに見てみると、時間が長いほど平均正答率が高いとは言えない結果であった。[図2]

イ 「自分で計画を立てて勉強している」についての経年比較(同一学年)

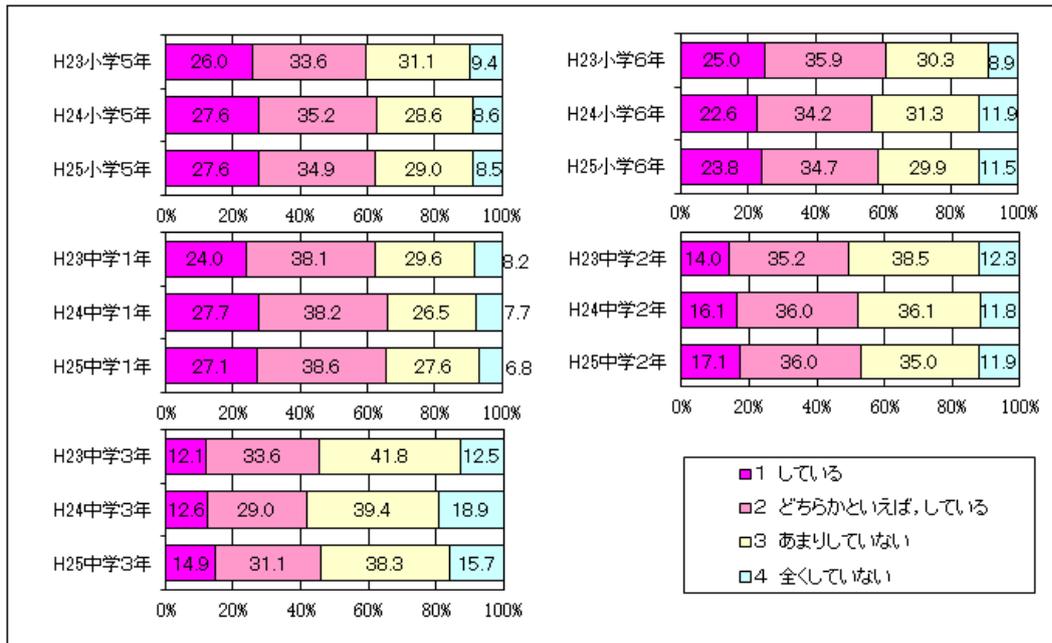


図3 「自分で計画を立てて勉強している」の回答の割合の経年比較

平成25年度の調査において「している」「どちらかといえば、している」と回答した児童生徒の割合は、小学5年62.5%、小学6年58.5%、中学1年65.7%、中学2年53.1%、中学3年46.0%であり、中学2年生が最も高い割合であった。同一学年において「している」「どちらかといえば、している」と回答した児童生徒の割合を、平成23年度からの経年で比較すると、全ての学年においてははっきりとした傾向は見られなかったが、中学2年においてその割合は徐々に高くなっていった。[図3]

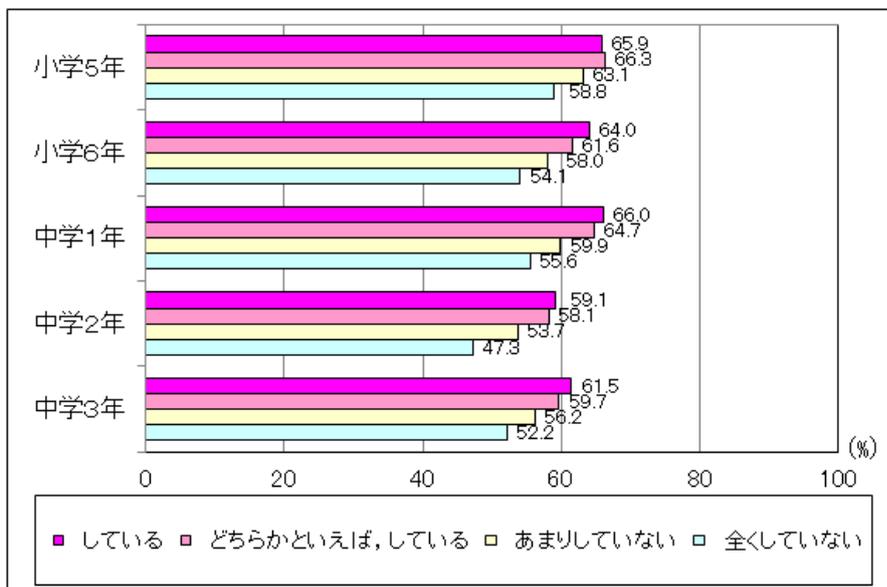


図4 「自分で計画を立てて勉強している」の回答状況と全教科平均正答率(平成25年度)

回答状況と全教科平均正答率との関連をみると、小学6年から中学3年までにおいて「している」と回答している児童生徒の平均正答率が最も高くなっていった。小学5年においては、自分で計画を立てて勉強している児童の平均正答率の方が、計画を立てて勉強していない児童の平均正答率に比べて高くなっていった。「している」と回答した児童生徒の平均正答率と、「全くしていない」と回答した児童生徒の平均正答率との差を見ると、全ての学年において7.0ポイント以上の差があった。特に、中学2年では、11.8ポイントあり最も大きかった。

[図4]

○ これからの指導に向けて

家庭との連携を図り、家庭学習の定着を

普段、学校の授業以外に学習している時間について、平成23年度からの経年で比較すると、小学校では、1時間以上勉強している児童の割合は年々高くなっていった。中学校において2時間以上勉強している生徒の割合は、どの学年も平成23年度と比較して高い割合であった。一方、学習時間と全教科平均正答率との関連を見ると、長い時間勉強している児童生徒が必ずしも平均正答率が高いとは限らない結果となった。学校によっては、年度当初に家庭学習について記した手引きを配付し、学習の時間や学習への取り組み方、学習の内容等を示しながら家庭学習の定着に取り組んでいる。その際、学習への取り組み方について「テレビを消して」や「机の回りを整理して」など学習に集中できる環境作りを示している学校もある。このような取組は、児童生徒が集中して学習に取り組む上で大切なことと考える。今後も、家庭での学習環境にも目を向け、家庭と連携を図りながら指導していくことが大切である。

家庭学習への意識を定着させるためには、年度当初に示すだけでなく、定期的に意識付けを図る必要がある。意識付けを図る方法の1つとして、児童生徒やその保護者を対象とした意識調査を行うことが考えられる。意識調査を定期的に行っていくことで、児童生徒に家庭学習の状況を振り返らせながら意識の定着を図るだけでなく、その保護者に対しても家庭での児童生徒の学習状況について考えてもらう機会としたい。

家庭での過ごし方に計画性を

計画的に勉強を進めている児童生徒の割合を平成23年度からの経年で比較すると、はっきりとした傾向は見られなかったものの、全教科平均正答率を見ると、計画的に勉強を進めている児童生徒ほど平均正答率が高くなっていった。このことから、学習時間を延ばすことも大切であるが、限られた時間をどのように活用していくかについて児童生徒に考えさせることも大切であるとする。1日の過ごし方や1週間の過ごし方について考えさせる時間を学校または家庭で確保し、計画的な過ごし方を意識させ、効率のよい学習習慣を身に付けさせることが大切である。

最終更新日：2013-10-21

平成25年度佐賀県小・中学校学習状況調査及び全国学力・学習状況調査を活用した調査Web報告書

Web報告書もくじ> IV 児童生徒意識調査結果の分析

IV 児童生徒意識調査結果の分析

児童生徒意識調査結果の分析に関わる全てのグラフ

5 生活習慣等

- 読書をする時間は、学年が上がるに従って短くなっており、平成23年度からの経年で比較してもはっきりとした傾向は見られなかった。[図1]
- 普段テレビ等を視聴する時間は、平成23年度からの経年で比較をすると、小学5年、中学1年、中学2年、中学3年において2時間以上視聴している児童生徒の割合が年々低下していた。[図3]
- 普段テレビゲームを1時間以上する児童生徒の割合は、全ての学年で5割を下回っていたが、その割合は、平成23年度と比較して高くなっていた。テレビゲームをする時間が長い児童生徒ほど平均正答率は低くなっていた。[図5][図6]

ここでは、家庭での生活習慣について、読書をする時間やテレビを見る時間、ゲームをする時間といった家庭での過ごし方を平成23年度からの調査結果と比較し、分析を行った。また、平成25年度の調査結果と全教科平均正答率との関連からも分析を行った。

ア 「家や図書館で、普段(月曜日から金曜日)、1日あたりどれくらいの時間、読書をしますか(教科書や参考書、漫画や雑誌は除きます。)」についての経年比較(同一学年)

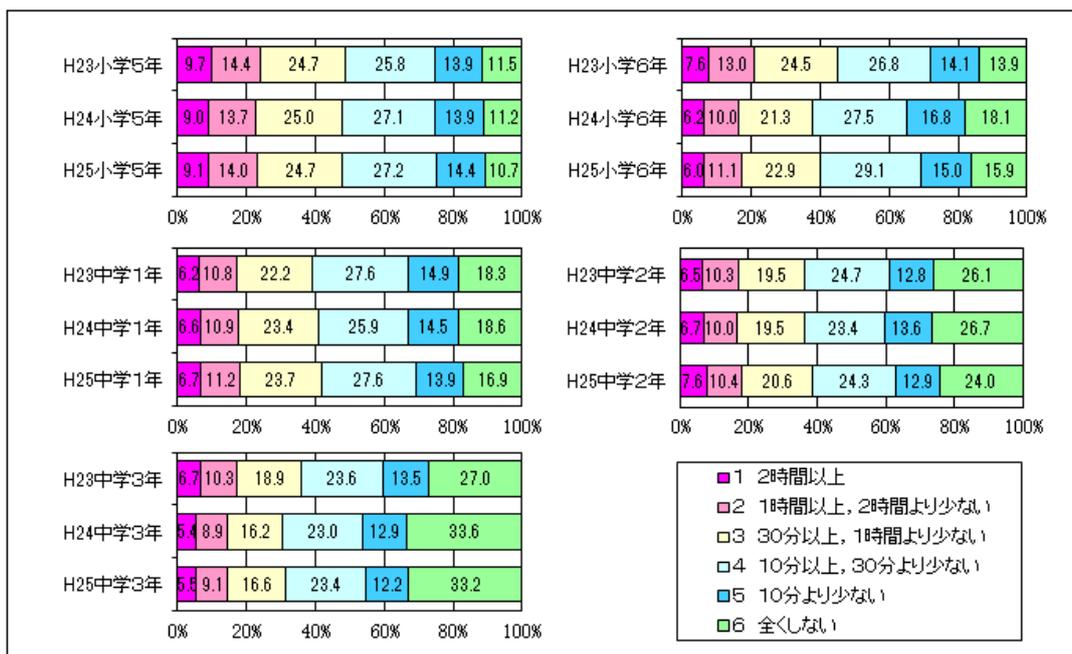


図1 「家や図書館で、普段、1日あたりどれくらいの時間、読書をしますか」の回答の割合の経年比較

平成25年度の調査を見ると、全ての学年において「10分以上、30分より少ない」と回答した児童生徒の割合が最も高かった。「全くしない」と回答した児童生徒の割合を見ると、学年が上がるに従ってその割合は高くなっていた。特に、中学3年においては33.2%と最も高くなっていた。平成23年度からの経年で比較すると、全ての学年においてはっきりとした傾向は見られなかったが、学年が上がるにつれて読書をする時間が減る傾向にあることには変わりなかった。[図1]

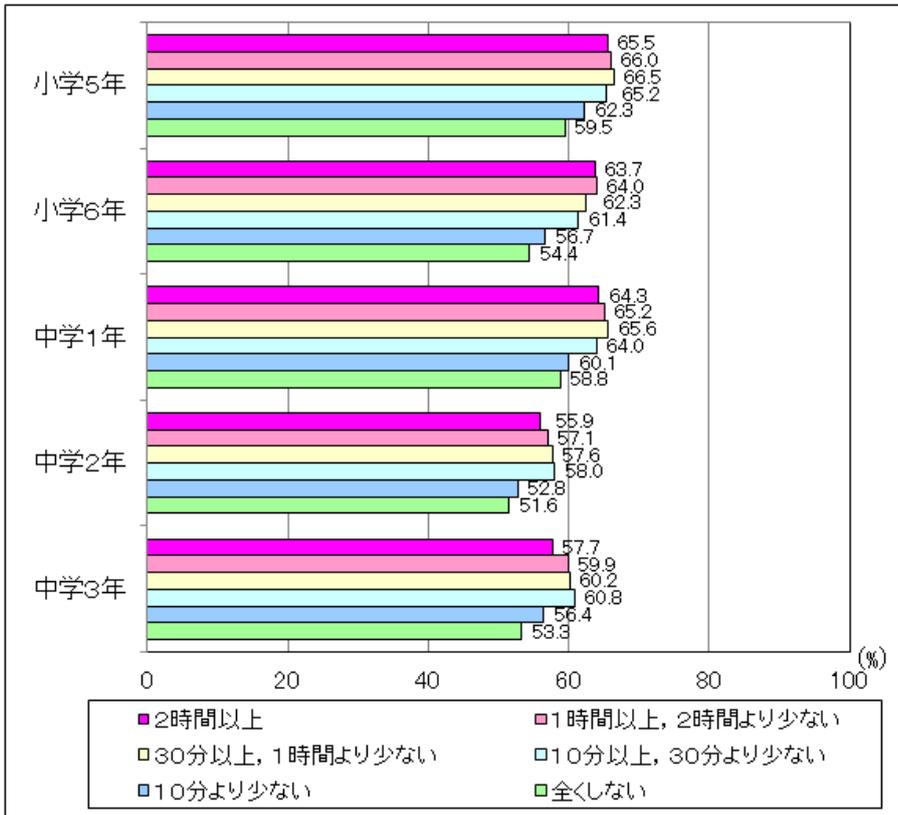


図2 「家や図書館で、普段、1日あたりどれくらいの時間、読書をしますか」の回答状況と全教科平均正答率(平成25年度)

回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、10分以上読書している児童生徒の平均正答率の方が、10分より少ない時間読書をしている、または全く読書をしていない児童生徒の平均正答率よりも高い結果となった。10分以上読書している児童生徒の平均正答率を選択肢別に見ると、はっきりとした傾向は見られなかった。[図2]

イ 「普段(月曜日から金曜日)、1日あたりどれくらいの時間、テレビやビデオ・DVDを見たり、聞いたりしますか」についての経年比較(同一学年)

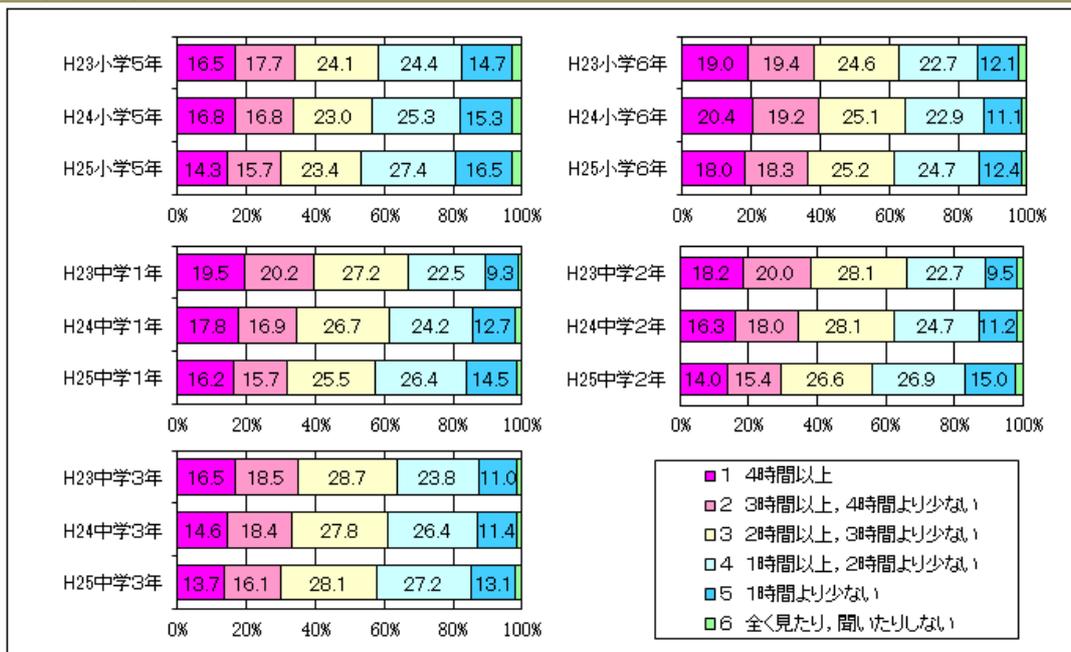


図3 「普段、1日あたりどれくらいの時間、テレビやビデオ・DVDを見たり、聞いたりしますか」の回答の割合の経年比較

平成25年度の調査結果を見ると、小学5年と中学1年、中学2年では「1時間以上、2時間より少ない」と回答した児童生徒の割合が最も高く、小学5年27.4%、中学1年26.4%、中学2年26.9%であった。小学6年と中学3年では「2時間以上、3時間より少ない」と回答した児童生徒の割合が最も高く、小学6年25.2%、中学3年28.1%であった。平成23年度からの経年で比較すると、小学5年、中学1年、中学2年、中学3年において、1時間以上テレビやビデオ、DVDを視聴している児童生徒の割合が低くなってきた。小学6年においては、1時間以上視聴している児童の割合は、平成24年度と比較して0.6ポイント下回る結果であり、2時間以上視聴している児童の割合を見ると、3年間で最も低い割合であった。[図3]

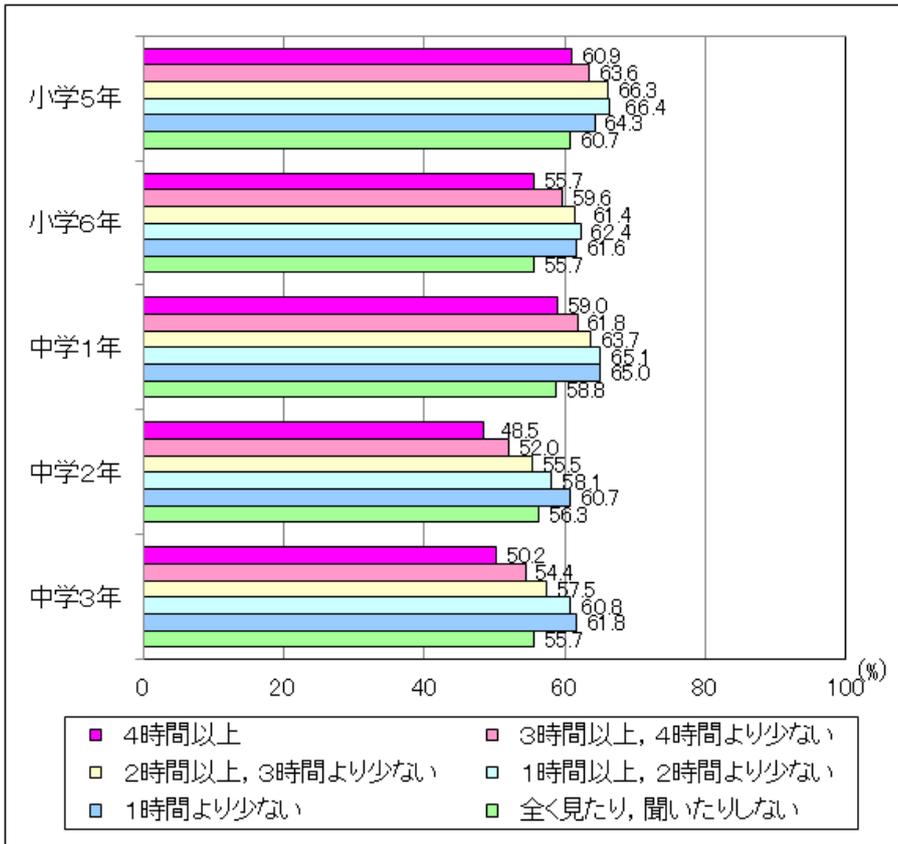


図4 「普段、1日あたりどれぐらいの時間、テレビやビデオ・DVDを見たり、聞いたりしますか」の回答状況と全教科平均正答率(平成25年度)

回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、小学校では、「1時間以上、2時間より少ない」と回答した児童の平均正答率が高くなっていた。中学校では、「2時間以上、3時間より少ない」と回答した生徒の平均正答率が高くなっていた。また、小学校、中学校共に、「4時間以上」「全く見たり、聞いたりしていない」と回答した児童生徒の平均正答率が低くなっていた。

[図4]

ウ 「普段(月曜日から金曜日)、1日あたりどれくらいの時間、テレビゲーム(コンピュータゲーム、携帯式のゲームをふくみます。)をしますか」について

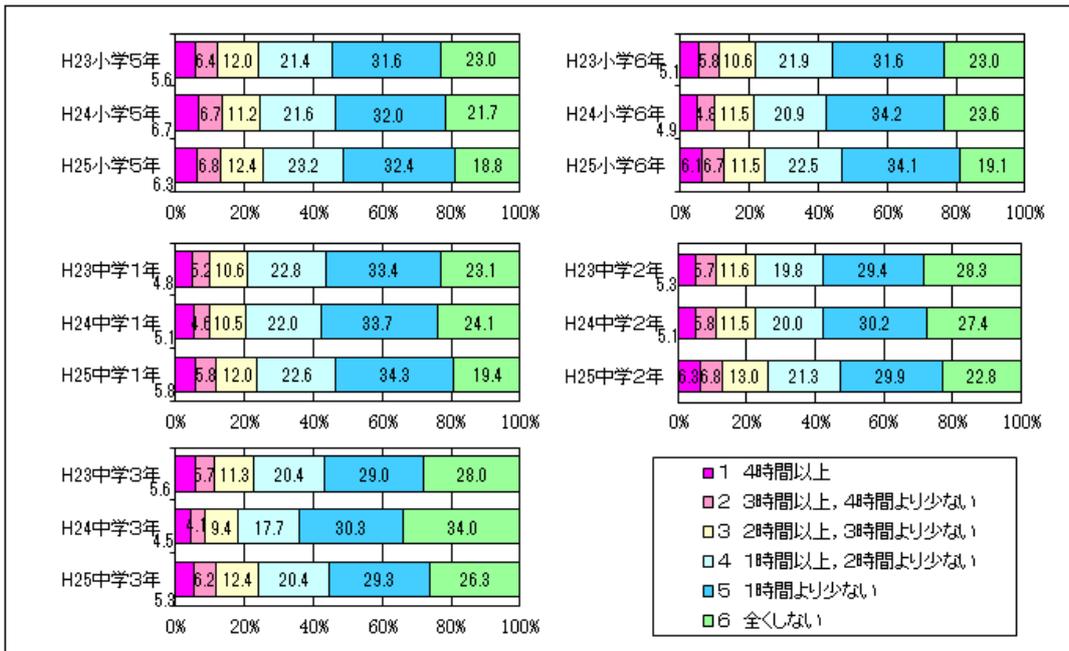


図5 「普段、1日あたりどれくらいの時間、テレビゲームをしますか」の回答の割合の経年比較

平成25年度の調査結果を見ると、全ての学年において「1時間より少ない」と回答している児童生徒の割合が最も高く、小学5年32.4%、小学6年34.1%、中学1年34.3%、中学2年29.9%、中学3年29.3%となっており、小学校、中学校ともに、学年が上がるとテレビゲームをする時間が減少する結果であった。同一学年において、「1時間より少ない」「全くしない」と回答した児童生徒の割合を、平成23年度からの経年で比較すると、小学5年と中学2年において徐々に低くなってきていた。小学6年と中学1年、中学3年においては、平成23年度と比べて低くなっており、3年間の中で最も低い割合であった。[図5]

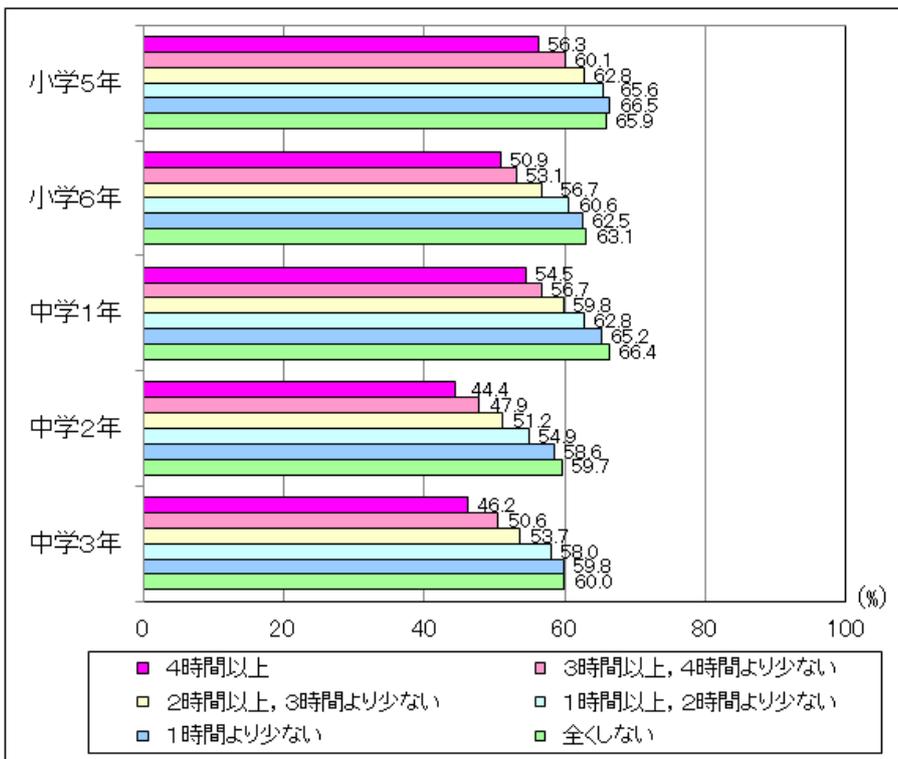


図6 「普段、1日あたりどれくらいの時間、テレビゲームをしますか」の回答状況と全教科平均正答率(平成25年度)

回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、小学5年では、「1時間より少ない」と回答した児童の平均正答率が最も高く66.5であった。他の学年では、「全くしない」と回答した児童生徒の平均正答率が最も高く、小学6年63.1、中学1年66.4、中学2年59.7、中学3年60.0であった。全ての学年においてテレビゲームをする時間が長くなるにしたがって、平均正答率は低くなっていった。[図6]

○ 今後の指導に向けて

学校、家庭、地域が一体となって読書をする習慣を

平成22年12月に国立教育政策研究所から公表された「PISA2009の課題を受けた今後の取組」の中で、「子どもの読書活動の推進」として「家庭、地域、学校における取組の一体的推進」を掲げている。そこで、学校以外での読書の時間と全教科平均正答率との関連を見てみると、10分以上読書をしている児童生徒の平均正答率の方が10分より少ない時間読書をしている児童生徒、または、全く読書をしていない児童生徒の平均正答率よりも高い正答率であった。このことから、適度な時間、読書をすることが学力の向上によい影響を与えていることがうかがえる。しかしながら、平成23年度からの経年比較を見ると、どの学年においても読書をする時間が短くなる傾向がうかがえた。家庭での読書活動については、これまでも「親子で読書」や「家読(家庭での読書)」といった家庭と連携を図った学校独自の取組を行ってきた。これからもこのような取組を継続しつつ、地域で行われる読み聞かせ活動を紹介したり、読み聞かせボランティアを活用したりするなど、家庭や地域とより一層連携を図りながら読書をする習慣を身に付けさせることが大切である。

家庭との連携を図り、計画的な過ごし方を

テレビ等を視聴する時間と全教科平均正答率との関連を見ると、「1時間以上、2時間より少ない」と回答した児童生徒の平均正答率が高くなっていた。テレビゲームをする時間については、平成23年度からの経年で見ると、1時間以上テレビゲームをしている児童生徒の割合は、3年間の中で最も低くなっていた。テレビゲームをする時間が長くなるほど、平均正答率は低くなっており4時間以上テレビゲームをしている児童生徒と全くテレビゲームをしない児童生徒の平均正答率を比べると、全ての学年で9.0ポイント以上の差があった。家庭での過ごし方についても学習と同様に、計画性をもたせる必要がある。学校外での過ごし方について計画を立てさせることで、児童生徒にこれまでの過ごし方を振り返らせると共に、家庭でのよりよい過ごし方について考えさせることも大切である。

最終更新日: 2013-10-21